

公的自意識と化粧行動の目的及び醜形恐怖心性の関連の検討

○倉永 真希・尾形 明子
(広島大学大学院人間社会科学研究科)

問題

健常者における容姿全体あるいは一部分に強い関心を向ける傾向を醜形恐怖心性と呼ぶ(大村他, 2015)。

自己への社会的な反応を通して自己に対して意識、関心を向ける側面を公的自意識といい(Scheier et al., 1975), 鍋田(1997)は、醜形恐怖症患者が一般学生と比較して公的自意識が有意に高いことを明らかにした。しかし、健常者における醜形恐怖心性と自意識との関連についてはわかっていない。

また、醜形恐怖心性に影響を及ぼす要因として、化粧行動が挙げられる。高坂(2017)は、他者を意識した理由で化粧をすることで容姿に対する劣等感は強まる一方、自分の気持ちを高揚させる目的で化粧を行うことで劣等感は低減することを示している。このことから、化粧行動やその目的が、醜形恐怖心性と関連している可能性があると考えられる。

化粧行動は、自意識との関連も指摘されており、公的自意識は、他者から見られる自己を意識した化粧の目的と強い関連を示すこと(柳澤他, 2012)が報告されている。

そこで本研究では、大学生における醜形恐怖心性と化粧行動、自己意識との関連について検討を行う。本研究の仮説は以下のとおりである。①公的自意識が高いものは醜形恐怖心性が高い。②他者を意識した化粧行動の理由である「他者評価の上昇」や「マナー」が高いものは醜形恐怖心性が高い。③「他者評価の上昇」や「マナー」が高いものは公的自意識が高い。

方法

広島大学の講義室にて集団で質問紙調査を実施した。

分析対象者

調査対象者のうち、化粧品・化粧道具の使用頻度項目(高坂, 2017)18項目の少なくとも1項目に「1: 使用しない」以外の回答をした大学生39名。

尺度

醜形恐怖心性 醜形恐怖心性尺度(大村他, 2015), 9項目5件法。

公的自意識 自意識尺度日本語版(菅原, 1983)。「公的自意識」と「私的自意識」の2因子から構成さ

れており、本研究では「公的自意識」の因子のみを用いた。21項目7件法。

化粧行動の目的 化粧をする理由項目(高坂, 2017)。「他者評価の上昇」「習慣」「気分の高揚」「マナー」「周囲からの影響」の5因子。35項目5件法。

結果

各変数間の相関係数を算出した結果、公的自意識は、醜形恐怖心性と中程度の正の相関を示した($r = .65, p < .001$)。他者評価の上昇は、醜形恐怖心性と公的自意識との間に中程度の正の相関を示した($r = .68, p < .001$; $r = .55, p < .001$)。気分の高揚は、公的自意識と中程度の正の相関を示した($r = .42, p = .009$)。一方、マナーと公的自意識との間には、相関が見られなかった($r = .22, p = .173$)。

考察

本研究の結果、仮説は一部支持された。

醜形恐怖症患者だけでなく、一般学生でも醜形恐怖心性と公的自意識との関連が示されたことから、醜形恐怖症に対して「公的自意識」という観点から予防的な介入を検討できる可能性があると考えられる。

醜形恐怖心性と化粧行動の理由との関連について、醜形恐怖心性は他者評価の上昇の関連は見られたがマナーとの関連はみられなかった。理由として、「マナー」因子は、他者を意識した化粧をする理由ではない可能性があるため、各因子は他者または自分の内面を意識した化粧をする理由としてどの程度妥当であるか今後明らかにする必要がある。

また、公的自意識は「他者評価の上昇」、「気分の高揚」とも正の相関を示した。「気分の高揚」との間に正の相関が見られたことは、仮説と異なる結果であった。理由として、「人に綺麗だと思われることが、自分のモチベーションになる」など、「気分の高揚」を理由とした化粧行動の根底に「他者評価の上昇」を理由とした化粧行動がある可能性が考えられる。

本研究はサンプルサイズが小さいため、本研究の結果が大学生全般にあてはまるかどうかについては疑問が残る。今後はサンプルサイズを拡大し、より詳細な検討を行っていく必要がある。